

# 私のシンプルライフ

(筑摩書房 1988 年)



伊藤 明己

この本に最初に触れたのは、著者からいただいたときだったかと思う。はいこれ、という感じで渡されたことは憶えているのだが、いつだったか定かではない。わたしは大学院生の身分で結婚したから、そのときか、子どもができて河口湖におじゃましたときか、たぶん後者だったのではないだろうかと思う。確か、いただいてからそんなに間を空けずに読んだ。

そのときも、いま読み直してみてもだが、人生へのアドバイスとして受け取った。というのも、この本は著者の生き方についての本だからだ。時代状況とそれに対応した青年が時に応じてまた心持ちに応じて知識をえて、それらを指針にしたりしなかったりしながら、大人になっていったこの実践の記録は、わたしにとっては社会学的な知識の確認でもあり人生のなかで思い出す目印でもあったと思う。それとちょうど文庫版が増えてきたオーウェルをつまむようになったきっかけにもなった。

驚くことに、このシンプルライフの本は、88年というバブル期に出版されている。著者の生き方がぶれていなかったということだろう。それから数年後、バブル期の超売り手市場のなか就職活動もせずに大学院に入ったわたしは、そ

のなかの一つの講義で革ジャンでヒゲ面の若い先生が現れたことにちょっとビックリした。バイクをふかす姿にもだが、そのくせ淡々としたやさしい語りにギャップも感じ、学生たちはその先生を潤さんと呼ぶようになった。

潤さんのやさしい語りは、文体にもあらわれている。とくに、いつもつかう僕という一人称がとても気になる。僕というのは、気負っていないというか、大学の先生がそれも文章に使う一人称にはなんだかふさわしくない。このなんともいえない微妙な感じはこの本にかぎってというわけではないのだが、とくにこの本は、前作に引き続き僕が自分のことについて書いていて、気持ちを吐露する場面がたくさんある。親との関係、恋愛と結婚、そして子をもって親となること、得てきた知識と行動を自分の人生に当てはめて考察というか綴ること、じっくりくのだが、やさしい語りと相まって、読んでいると不思議な気持ちになる。でも自分が同じ事をやるとなると、たぶん気恥ずかしくてできない。そんな絶妙なバランスで書かれている。

当時住まれていた大山崎町のマンションの自宅にお呼ばれたときがあった。小高いところにあったマンションのそれも屋上だったので、

## 私のシンプルライフ

見たこともない絶景だった。そのとき、大学の先生のご自宅へのお呼ばれだから、ちゃんとしているというか勝手なイメージを妄想していたんだろう。明るくとても広い部屋のなかの家具の配置だったり、自身で準備された料理だったり、パートナー（いなかったかも）やその頃中学生だったか高校生だったか帰宅してきたお子さんとの会話（しなかったかも）だったり、思いがけなくなんだか当たりまえではない感じをうけていた。だから、わたしはこの本に書かれている家族を、うろ覚えだが、知っていて、思い出しながら読んでいたんだと思う。いま、あの時のお子さんと同じくらいの子を持つ身となってみると、うまく子育てが出来たかどうかということではなく、同じような知識を持ってそれをかみ砕いて同じような心持ちで過ごしてこられたのか心許ない。あのとき、わたしは、学をことさらひけらかすわけでもなく、社会について深く知ったうえで過ごしている絶妙な大人を感じていた。そんなことをこなせる人なんてそうそういない。

仕事について書かれている部分は、自分が大学で教えるようになったいま、とくにゼミに所属してくれる学生たちの窮状と重ねてしまう。かれらは片っ端から不採用で気力がなくなったりする。生きることと仕事をする事、仕事に誇りを持つこと、生き方にライフスタイルをもつことなんて、なかなかできない。自分自身は

バブル期の大学生で、大学にはあまり行かずいまでいう起業をしながら逃げ場所の確保で大学院に入るという変わり種だったが、二世紀もけっこう回ったいまは、あの頃とはまたちがったかたちで別の人生を生きようとする人たちが増えてきたようで、すこし期待している。不況の時代から人口減少の時代になり、大きなものより、身近で小さな集まりに目が注がれるようになった。それはいま、ソーシャルなもの、とおよそ言い表されているようだ。

研究のおもしろさを教えてもらったわたしは、大学に職をえたもののタイミングの悪さから田舎暮らしで都会への飛行機通勤というおかしな生活を続けている。どちらかという田舎で家族と一緒にいる方が多いので、決して単身赴任ではないのだが、そんなところから、いまあふれているソーシャルなものや集まりや活動を見渡してもみると、そこにはシンプルライフが通底している。この本はそんな時代を超えた普遍的なものを扱っているといえるだろう。いや河口湖に住み早期退職する潤さんはぶれていないのだから、時代がまた追いついてきたといったほうがいいのだろうか。この本のコンパクトな続編が書かれるべきだとも思う。シンプルライフを生きるモデルとなりうる続編には、人生を下りていく親との関係について、それと僕のリタイヤについても含めて欲しい。